『純な心』における
コルミッシュ爺さんの挿話の発展

黒 川 美 和
〈青山学院大学〉

Résumé

Dans *Un cœur simple*, Flaubert indique 8 années. Seul l'an 1793 ne s'écrit ni en quatre chiffres, ni se place dans l'ordre chronologique, ni dans la diégèse de ce conte. Félicité soigne de façon dévouée le vieux Colmiche. Lequel passe « pour avoir fait des horreurs » cette année. Ce qu'il a fait n'est jamais décrit concrètement, de sorte que l'on ne connaît jamais le détail des circonstances. Flaubert met une progression à l'épisode du père Colmiche, en réduisant le concret et en dressant le symbolique. Sa progression, c'est l'intention d'une écriture la plus perfectionnée pour déployer les ailes d'imagination des lecteurs. Cette communication se propose de trouver le point de tangence entre la Révolution et la vie de Félicité par l'intermédiaire de cet épisode.

序　論

フローベールは『純な心』において次の 8 つの年号を明示している。

1809年　オーバン氏が亡くなる
1819年　ヴィクトールが遠洋航海に出る
1825年　オーバン夫人が玄関の壁を塗り替える
1827年　オーバン家の屋根が倒壊する
1828年　オーバン夫人が聖餐のパンを献上する
　93年　コルミッシュが恐ろしいことをする
1837年　ルルが死ぬ
1853年　オーバン夫人が亡くなる

この中で1793年だけが、4 桁表記でなく、時代順でもなく、物語内容の外に置かれた年号である。フェリシテは豚小屋の跡に住みついているコルミッシュ爺さんを献身的に世話するのだが、その人物がこの年に残虐なことをした人物とされているのだ。彼が何をしたのかということは具体的に描写されていない。なぜフローベールは読者にフランス革命を喚起させるこの年号を記したのだろうか。1793年は、恐怖政治が猛威をふるい、ルイ16世、マリー＝アントワネットが処刑された年である。また忘れてはならないのは、『純な心』（1876年執筆）のほんの二年前に出版されたヴィクトール・ユゴーの小説『93年』（1874年）だ。この小説は王党派が革命政府に起こした反乱であるヴァンデ戦争を題材にしている。いかなる理由からこの歴史的政治的な年号がコルミッシュの挿話に挿入されているのだろうか。

本稿の目的は、この挿話をとおしてフランス革命とフェリシテの生涯の接点を見出すことにある。

I

まず最初に、コルミッシュ爺さんの挿話を引用する。

> ポーランド人のつぎは、コルミッシュ爺さんだった。93年にいろいろと残虐なことをしたという評判の老人である。彼は川辺の、豚小屋の跡に住んでいた。いたずらっ子たちが壁の隙間から覗いて、石を投げたりした。石は彼の粗末な寝床の上に落ちた。髪がぼうぼうに伸び、まぶたがただれ、腕には頭より大きな腫物ができ、たえず咳込んで身を揺すぶり、寝床に横になっていた。彼女は下着を持って来たり、小屋の掃除をしたりした。奥様に迷惑をかけないなら、パン焼き場に住まわせたいと想っていた。腫物がつぶれると、彼女は毎日包帯を変えた。彼にガレットを持っていったり、藁を束ねた上に座らせ日向ぼっこさせたりした。そして哀れな老人は、涎を繰り身を震わせながら、弱々しい声で礼を言い、見捨てられるのを恐れて、彼女が帰りかけるのを見ると慌てて両手を差し出すのだった。彼が死んだ。彼女は冥福を祈ってミサをあげてもらった[1]。

挿話は次の10の要素から成り立っている。彼の過去、住居、子どもたちのいたずら、彼の病状、風貌、フェリシテの献身的介護、フェリシテの夢想、フェリシテに対する彼の態度、彼の死、ミサである。

この挿話はオーバン夫人との抱擁をきっかけにフェリシテの愛の徳が他人に向けられる極みとして描写されたものである。『純な心』が、愛する対象を次々に失い苦悶する、その打ちひしがれた心が昇華することを主題にした物語であるとするなら、第3章の終わりに位置する、つまり物語全体のほぼ真ん中に位置する、この挿話は、この作品全体の蝶番として機能していると言える。なぜなら、この挿話の前には、フェリシテがテオドール、ポール、ヴィルジニー、ヴィクトールを失い、オーバン家にまつわる人々が他界するということが叙述され、この挿話の後には、フェリシテとルルの共生の様子が叙述されていくからである。オウムは、コルミッシュの葬送の日に贈られるので、フェリシテにとってはコルミッシュの生まれ変わりとなる。

コルミッシュの名は、プランや三つの要約[2]に記載されているので、フローベールはコルミッシュの挿話を物語の展開になくてはならないと考えていたと言える。実際、草稿11に作者の注がある。この注は『純な心』の全ての草稿の中でも異例のものである。

> コルミッシュ爺さんの挿話を、一つの叙述であるにせよ、できるだけ発展させる[3]

決定稿と草稿を比較すると要素の増減がある。表1は、上記10の要素に、削除されることになる2つの要素、つまりコルミッシュの家族とフェリシテの仕事を加えて、構成される要素の有無を草稿ごとに示したものである。

1 Gustave Flaubert, *Trois Contes*, introduction et notes par Pierre-Marc de Biasi, Le Livre de Poche classique, Librairie Générale Française, 1999, pp. 75–76.

2 Giovanni Bonaccorso et collaborateurs, *Corpus Flaubertianum I*, Société d'édition « Les Belles Lettres », 1983. プランは草稿2 (p. 4)、要約は草稿15 (p. 25), 164 (p. 274), 165 (p. 275)。

3 *ibid.*, p. 19.

表 1

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
2				○		○			○		○	○
11	○	○		○	○	○			○	○	○	○
15		○			○	○						
164												
165												
168		○		○	○	○	○		○	○	○	
184	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
185	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
188	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
190		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
191	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
194	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

数字は、ボナッコルソによって付された草稿の番号である。

A：コルミッシュの過去
B：コルミッシュの住居
C：子どもたちのいたずら
D：コルミッシュの病状
E：コルミッシュの風貌
F：フェリシテの献身的介護
G：フェリシテの夢想
H：フェリシテに対するコルミッシュの態度
I：コルミッシュの死
J：冥福を祈るミサ
K：コルミッシュの家族
L：フェリシテの仕事

II

草稿11からコルミッシュ爺さんの挿話を引用する。

> それは彼女の心を狭めるどころか広げるものだった。しかしまもなく彼女はオーバン夫人に対するのとコルミッシュ爺さんに対するのと、時間をやりくりしなければならなくなった。コルミッシュ爺さんは身体が麻痺していてとても不潔である　子どもたちが遺棄した　彼のあばら屋　彼女は彼を世話して、彼に食べ物を与える　彼に会いにいくために急いで買物をする　仕事の途中、彼に食べさせてやる　顔を洗ってやる　藁の入った彼女の椅子に座らせて日向ぼっこさせてやる　そういうことが長く続く。コルミッシュ爺さんが死ぬ。フェリシテは彼のためにミサをあげてもらう[4]。

この草稿の下の欄外には二つの注が付されている。一つ目の注は、

> コルミッシュ爺さんの物語。それはスキャンダラスなものであった。しかし誰も関わりにならなかった。彼のあばら屋。彼女はそこに行く。彼の住居。快方に向かう　また病状が悪化する。死ぬ[5]。

二つ目の注は、先に引用したとおり、この挿話を発展させるという作者の意志が表されている。この草稿には10の要素のうち 7 つの要素と、彼の家族とフェリシテの仕事の 2 つの要素がある。

フローベールは創作過程においてコルミッシュの物語、つまり彼の過去をもっとも発展させていくので、草稿の中からその部分を抜き出していこう。スキャンダラスな物語がスキャンダラスな家族の描写を皮切り

4　*ibid.*, p. 19.
5　*ibid.*, p. 19.

に展開される。

草稿184では、

> 下劣な卑劣な悪党のそして不道徳な一族の長老であった。彼を遺棄した　子どもたちと孫たちが遺棄した。下劣な近親相姦の一族、親戚が監獄にいる　人の話では　彼自身は嫌悪をもよおさせた　昔密猟をしていたとき人を殺したということだった。密猟者として　子どもたちに元は豚小屋で床がないところに遺棄された[6]

コルミッシュには子どもだけでなく孫までいる。父、祖父という彼の立場は、フェリシテの立場と対照的だ。彼女は石工の8番目の子どもとして生まれる[7]が、両親に死別し、息子同然に思っていたヴィクトールにも死別し、兄姉の縁も切れている。彼の家族の要素は最終稿の前まで繰り返される。また、作者はコルミッシュがしたことを明確に書いている。年号は設定していないが。密猟ということで『ボヴァリー夫人』のビネーを思い起こさせる。収税吏は密猟をしているときにエンマを危うく殺めそうになった[8]。

草稿185[9]で、彼は若い頃密猟者でクロワマール侯爵の森番を殺したとある。これも年号のない情報だ。この物語の舞台はノルマンディーでありブルターニュではないが、某侯爵の森番というのは歴史的政治的人物であるジャン・ニコラ・ストッフレを思い起こさせる。ヴァンデ軍蜂起において参謀長になる人物である。彼は、コルベール・モーレヴリエ伯爵の森番であった。森番というのは、地理的に複雑な西部の戦争にあっては、重要な職である。またクロワマール侯爵と名前が似ているクロワ公爵が、1791年に亡命する。彼はヴァンデ地方の中心都市ショレに領地を持っていた。1793年には革命政府軍がそこに陣営を張る。クロワマールというのはギュスターヴの母方の祖母の名字でもある。ジャン・ポール・サルトルによれば、彼の母、「カロリーヌは自分のことを、母親を通じては貴族であり、父親を通じてはシュアン、ふくろう党だと思いたがった。実は彼女の父親は早死をして西部フランスの反乱には参加できなかったし、法律家であったり司祭であったりしたカンブルメール・ド・クロワマール家の人々は、決して帯刀したことなどなかった」[10]ということだ。可能性だが、王党派か革命派の若いコルミッシュが敵の森番を殺したかもしれない。

草稿191で、初めて問題にしている年号が左の欄外に見出される。

> のどをかき切って殺した　残虐なことをしたという評判だった　残虐なこと　そして　彼自身は93年当時の足焼き賊の一味に属していた[11]

「足焼き賊」とは『ロベール仏語歴史辞典』によると「（1798年の文献資料に見出される語で）隠し金の隠し場所を明かさせるため、足を焼いて犠牲者を拷問する賊」[12]のことである。コルミッシュ爺さんは王党派か革命派といった政治的なあるいは非政治的な一味に属して残虐なことをしたということだろうか。

草稿194[13]ではフローベールは政治的で歴史的といった印象を与えるクロワマールの名も足焼き賊の語も残していない。そして決定稿ではさまざまな段階で繰り返し書き記してきたコルミッシュの家族の要素もすべて消し去る。換言すると、具体的な叙述は全て削除されてしまうのだ。

---

6 *ibid.*, p. 308.
7 *ibid.*, 29 (p. 47), 30 (p. 50).
8 Gustave Flaubert, *Madame Bovary, Mœurs de province*, Garnier, Bordas, 1990, II, 10 (pp. 169–170).
9 Bonaccorso, *op. cit.*, pp. 310–311.
10 Jean-Paul Sartre, *L'Idiot de la famille*, Éditions Gallimard, 1971, p. 83.
11 Bonaccorso, *op. cit.*, p. 320.
12 Alain Rey, *Dictionnaire historique de la langue française*, Le Robert, 1995.
13 Bonaccorso, *op. cit.*, pp. 325–326.

しかし年号を挿入するだけで十分である。というのはコルミッシュ爺さんの挿話に先行する叙述は『純な心』の中でもっとも歴史的で政治的であるからだ。七月革命ゆえに公務員の配置換えと任用が行なわれ、それでオウムを飼っている新しい副知事がこの物語に登場する。またフェリシテが門前で振る舞い酒をする兵士たちは新体制の軍隊に所属している。そして彼女が庇護するポーランド人たちは七月革命の影響を受けてロシアの占拠に対して蜂起したものの失敗に終わり亡命してきた人々だ。また布石が密かに張られている。第 1 章のオーバン氏の肖像画だ。彼はミュスカダンの格好をしている。これは彼が王党派であることを示している。そして第 3 章の三分の一のところに1819年 7 月14日月曜日という日付がある。ヴィクトールが遠洋航海に出ると報せにきた日付で、この物語全体で記される唯一の日付だ。実は草稿にはもう一つの日付があった。ヴィルジニーが修道院に出立する日付だ[14]。フローベールはその日付を消去する。その消去によって、我々にもっともフランス革命を喚起させる 7 月14日が一層強調されるようになる。こうした暗示的な記述のおかげで我々は自動的にコルミッシュの物語を歴史的政治的に読んでしまうようになるのだ。

決定稿で、スキャンダラスな物語は、具体的な描写が削除され、そしてもっとも象徴的な年号だけが残され、一行で片付けられている。全てが読者にゆだねられるのだ。読者は、この老人があたかも社会の動乱期に暗躍した反徒の軍団の一味であるかのように想像してしまうのだ。

もはや活力のないこの人物をどのような気持でフェリシテは世話するのだろうか。草稿を参照しながら、フェリシテとコルミッシュの関係を調べ、それを彼女と他の人物たちとの関係と比較してみよう。

Ⅲ

まず、フェリシテの宗教的実践の様子が描かれている箇所が第 1 章にあるが、それをとりあげよう。

> 彼女は朝早く起き、ミサを欠かすことはなかった。（中略）灰に熾を埋めて彼女は 暖炉の前でロザリオを手に眠るのだった[15]。

コルミッシュ爺さんの挿話は1830年代の初めの設定だ。彼女は壮年期で40歳ぐらいである。計算すると、フェリシテの誕生は問題にしているあの年の頃という設定になっている。この挿話に至るまで、彼女の宗教生活は、 3 回、変化している。まず、子ども時代、彼女は、彼女の境遇のせいというだけでなく、キリスト教を否定した時代のせいで、宗教教育を受けることができなかった[16]。そういう状態から、オーバン夫人に雇われ、規則正しく教会に行く習慣を持つブルジョワの家族に付き添うという形で、彼女も教会に行くようになる。二度目は、ヴィルジニーのカテキズム、それは彼女自身のカテキズムでもある。そのおかげで、彼女は宗教教育を受けるようになる。そしてキリスト教の象徴的な見方、信仰の中に生活を結びつける考え方を学ぶ。例えば、神の子羊への愛から羊を、精霊ゆえに鳩をいっそう愛情をこめて愛するようになる。そして三度目、オーバン夫人との抱擁だ。その後のコルミッシュとの出会いの時点では、彼女は積極的に宗教活動を行っている。コレラ患者を世話したり、また草稿には、自分の命を顧みず洪水のなか一人の子どもを救ったり、貧しい人々に自分のお金をあげたりすることなどが書かれている[17]。フェリシテはコルミッシュを世話する。これは『聖ジュリアン伝』のジュリアンがハンセン病者を世話するのと似ている。ジュリアンのように、彼女はコルミッシュの衣食住の欲求を満たそうとするのだ。

ところで、フローベールは、草稿で、フェリシテはコルミッシュを先祖のように世話する、と繰り返す。

14 *ibid.*, 111 (p. 181), 112 (p. 183), 115 (p. 188).
15 Flaubert, *op. cit.*, p. 49.
16 *ibid.*, p. 62.
17 Bonaccorso, *op. cit.*, 184 (p. 307), 185 (p. 310), 190 (p. 318).

草稿15[18]では、これは要約だが、フェリシテがヴィクトールに対しては母の愛情で、コルミッシュに対しては娘の愛情で愛する、と明快に捉えている。この親と子の関係は、草稿では、オーバン夫人との抱擁の後、フェリシテとオーバン夫人の間にさえも認められる[19]。決定稿では、獣のような献身と宗教的崇拝に置き換えられるものが、娘の優しさとなっていた。フェリシテとオーバン夫人の間のこの親と子の関係とフェリシテとコルミッシュの間のそれは消され、フェリシテとヴィクトールの間とフェリシテとルルの間にこの関係が移されるのだ。フェリシテはコルミッシュの存在を貴重なものとする。彼の中に、ジュリアンがハンセン病者の中に見ていたものと同じ、何か聖なるものをキリスト教的なものを見る。フローベールはそれを語彙の置き換えで暗示している。

表 2

	彼は……に住んでいた。	彼女は彼を……に住まわせたいと想っていた。	彼女は彼を……に座らせ日向ぼっこさせたりした。
2			藁の入った肘掛け椅子
11			藁の入った肘掛け椅子
168	*une ancienne* étable à porcs	薪小屋	
184	une ancienne étable à porcs	薪小屋	肘掛け椅子
185	*les décombres* < ancienne > *d'une étable* < à porcs > *à pourceaux*	薪小屋	肘掛け椅子
188	< les décombres > d'une porcherie *une ancienne étable*	薪小屋　パン焼き場	肘掛け椅子　藁の束
190	les <ruines> *décombres* d'une < étable > *porcherie*	パン焼き場	藁の束　藁
191	les décombres d'une porcherie	パン焼き場	藁の束
194	les décombres d'une porcherie	パン焼き場	藁の束

はじめに、コルミッシュの住居に関する語彙である。豚小屋 ancienne étable à porcs が décombres d'une porcherie に置き換えられる。家畜小屋 étable はイエスの誕生を想起させる語彙である。実際フェリシテはイエスが貧しい人々の間、家畜小屋の飼い葉桶で生まれたと想像している[20]。この置き換えによって、コルミッシュは、聖なるものではなく、フェリシテが世話する他の人物たちと同様、憐憫を感じさせる存在としてこの物語の中に登場することになるのだ。

次に、逆方向の語彙の変更を二つ見出すことができる。一つ目は、彼女はコルミッシュをオーバン家のパン焼き場に住まわせたいと夢想する、このパン焼き場は薪小屋となっていた。パン焼き場は彼女の仕事場の一つだ。そこで彼女はオーバン夫人のパンを、ガレットをそして自分用の 6 キロのパンを焼く。一方、薪小屋は薪を置く場だ。薪は燃やすと炭になる。炭といえば炭焼き、炭焼きの信仰、つまり素朴な信仰を喚起する。換言すると、素朴な信仰の場がキリスト教的な場に置き換えられるのだ。というのはパンはキリストの聖体であるから。また屋外が屋内に変更されたと言うこともできる。したがってコルミッシュに対する彼女の気持がいっそう深くなっている。

二つ目は、フェシリテはコルミッシュを藁を束ねた上に座らせ日向ぼっこさせるが、この藁の束は、肘掛け椅子だった。カテキズムの後、藁というのは彼女の心にはイエスが生まれた場所としてインプットされて

18 *ibid.*, p. 25.
19 *ibid.*, 168 (p. 279), 185 (p. 310), 186 (p. 313).
20 Flaubert, *op. cit.*, p. 61.

いるはずだ。フェリシテにとってコルミッシュの存在が聖性を示しているのだ。コルミッシュ爺さんの挿話は、フランス革命期に生まれ、幼年時代宗教教育を受けられなかった者の宗教的実践の収支報告なのだ。

結　論

コルミッシュ爺さんの挿話は一段落で完結していて、一見付随的な挿話に見えるが、物語全体と有機的に関わっている。フローベールは、具体的なものを削除し、象徴的なものを立ち上げるという方法で、コルミッシュ爺さんの挿話を発展させる。フローベールの言う発展とは、読者に想像の翼を広げさせるため、最小限に綴るということなのだ。フローベールはしばしば1848年の二月革命との関連で論じられるが、この物語ではフランス大革命が重要になっている。

質疑応答

フィリップ・デュフール　フローベールのエクリチュールがいかに省略的かを示してくれた発表に感謝いたします。なぜならコルミッシュ爺さんが足焼き賊であったなどとは、私は想像もしていませんでした。93年の恐怖と言えば、フランス人の読者はむしろ革命派の人を考えます。

黒川美和　ボナッコルソ編の草稿を読んで、私も「ショフール（足焼き賊）」という言葉は、すごく衝撃的というのか、びっくりする言葉でした。でも一番興味があったのは、93年ということです。一番最後で述べましたが、フローベールは自分が体験した1848年の2月革命との関連で論じられることが多いのですが、歴史を非常に勉強したフローベールですから、絶対にフランス大革命について何か意見を持っていると思うのです。これからそのことを勉強していきたいと思っています。その一番最初の取っかかりとして、この1793年という、非常に何か不思議なものを取り上げました。

フローベールの後期の作品では、普通は意図を言わないフローベールです。自分の意図を言わないフローベールだけれども、こういう本当の後期に、自分の革命に対する考え方の一端を覗くことができるような、そういう部分が文学の作品の中に現れているので、小作品ですが、おもしろい作品だと思います。

松澤和宏　コルミッシュ爺さんが革命派か王党派かということは草稿の解釈次第だと思いますが、いずれにしても彼が最終稿でも犯罪者であり、忌み嫌われる存在であることにはかわりがありません。そこでこの作品にとって重要なことは、フェリシテが自分の得にもならない、自分を愛することもないようなコルミッシュ爺さんを献身的に世話するという点にあると思います。キリスト教の伝統的な慈愛 charité を、赦し miséricorde をフェリシテは体現しているように思われます。

村田京子　デュフールさんが指摘されていたように、バルザックは足焼き賊についても語っていますし、ゴリオ爺さんは93年の人間として登場します。バルザックの影響がフローベールのこの小説に影響をおよぼしているのではないでしょうか。

松澤　フローベールは書簡を読む限りでは、革命反対派だと思いますが、革命に反対したカトリックのド・メーストルを好んではいません。

エリック・ボルダス　足焼き賊に関しては霧生教授が作成したコンコルダンスを使えば、バルザックが『人間喜劇』のなかで使用しているのかすぐにわかります。付け加えたいことは、93年に関しては特定の参照対象というよりも、集団的な想像界の次元の問題だと思います。

黒川　では先生は、コルミッシュが具体的にしたこと、密猟ということで出ていましたが、そういう密猟するというのは、集団的想像界の中に属するというか、一般通念にあるのでしょうか。

ボルダス　必ずしも特に93年に結びつくわけではないのですが。私は密漁者という形象は足焼き賊の形象と同じ様に集団的想像界に属すると思います。ちょうど93年や人間の諸々の典型が集団的想像界に属するのと同じです。

黒川　ありがとうございます。

ジゼル・セジャンジェール　結局93年は小説では消去されました。そこから生じるのは、愛の対象を求めるフェリシテの求めでしょう。それはフェリシテの聖性を脱神聖化するアプローチです。